

U S O T S U K I

嘘

月

著=杉山幌

illustration=キナコ

新連載  
第1回!

S系美少女の眼光が、探偵脳にグサリと刺さる？  
アブノーマル学園青春冒険譚!

杉山幌——Sugiyama Horo

1982年生まれ。2009年、第7回講談社BOX新人賞流水大賞受賞作『RIP』でデビュー。

キナコ——Kinako

香川県在住のイラストレーター兼会社員。うどんと猫を愛する。

「マルボタン」

「ワシントン・テストっていう心理テストがあるんだ」

一粒の砂を思い浮かべながら、おれは始めた。

「幼いジョージは桜の木を切ったが許された。実は、ジョージが許された理由は『正直に告白したから』じゃなかったんだ。では一体何だったでしょう？」

これがワシントン・テストだ。アメリカでは割に有名な心理テストでカウンセリングなどにも利用されているというのは嘘で、実際は今さっきおれが考えたものである。

入学してまだ二週間経ってないこともあつてか、朝の教室は賑わっていないながらもよそよそしい雰囲気があり、余白を埋めるような挨拶の声が目立つ。

「父親は息子に、過ちを許すことの大切さを教えたかったんじゃないか？」

敬太郎は前髪を弄りながら、さらりと言った。

江田敬太郎。おれより十センチばかり背の高いこの同級生は、目立つ男だ。浅黒く健康的な肌、理想的な細マッチョ、長い手足、緻密に造作された無造作ヘア。

それにしても、過ちを許すことの大切さとききましたか。

さすがイケメン脳。身も心もイケメン。出来過ぎていて胡散臭い気さえする。

「橋花は？」

敬太郎の隣、忙しなく右に左に首振り手振り髪揺らしおはようおはよう言っている橋花を促すと、橋花は挨拶ノックを止めて微笑みをたたえながら口を開いた。

「パパはジョージを性的な目で見ていたからだと思いますの」

「……それが何故許す理由なんだ」

「それは勿論、『パパ……どうすれば許してくれるの?』展開なの。パパの許し攻め」  
「許して攻めるって矛盾してるだろ!」

更に許すなら攻めじゃなくて責めだろと思わしたところで、ワシントン親子の秘め事を想像しかけて背中が総毛立ちそうになる。

坂本橋花。黒目がちのすこし眠そうな垂れ目は穏やかな印象を与え、か細い声は愛らしい。育ちの良いお嬢様然としていて、実際に家は金持ちだ。

しかし腐脳ふのう。驚くべきことに、橋花はあらゆる意味で自分のことを隠そうとしない。見た目とのギャップが功を奏したのか、橋花は橋花で上手くやっているようだ。おれにとっても、今の所唯一普通に話す女子である。

「理久りくは?」

「りっ君は?」

敬太郎、橋花と続け様におれに聞くが、このなんちゃって心理テストは今さっきでっち上げばかりなので、当然自分自身の答えなど用意していない。

だが、それを気取られてはいけない。先ほどプライベートの話題になりかけた。それを嫌ってワシントン・テストを出したのだと、悟られる可能性が生まれてしまう。

上手く混じる。この教室に、この空間に、この人間たちに。

「父親が息子を『許した』という先入観がポイントだな」

おれは自分が饒舌じょうぜつになる気配を感じながら、そう言った。

「先入観?」

「挿入感?」

「逆説」橋花のボケを無視して続ける。「チェスタトンばりの逆説だよ。父親が自ら許した

のではなく、ジョージが父親を許さざるを得ない状況に追い込んだんだ。ジョージは斧おので桜の木を切った。そして父親が現れた。状況証拠は揃っている。物的証拠すらある。しかし、父親は許さざるを得なかった。ここまで言えばもうわかんだろ？」

「もうわかんだろって言われてもな、俺はわからないな」

「わかん、パパとジョージのもう和姦だろ……」

「答えは一つ」やはり橘花のボケを無視して、おれは得意げに言う。「ジョージはまだ斧を手に持っていたから」だよ」

決まった。気分が良かった。体の芯から熱が湧き上がってくるような。

おれは、重度の探偵脳なのだ。

「おーなるほど、面白いじゃん。さすがにちよつと探偵っぽいな」

「ぼいは余計だぜ敬太郎」

探偵絡みで褒められると、つい調子に乗ってしまうおれだった。

「パパ×ジョージじゃなくて、ジョージ×パパだったの。りっ君の趣味がわかって嬉しい。来た時から今日の教室は白が眩しいと思ってたの、りっ君オーラだったの」

「そんなオーラ出してない！ お前らの頭の中には攻め受けしかないのか！」

「私たちには、全てを攻め受けに分ける能力が備わっている……」

「なんというCランク能力……」

諦めて首を振る俺だったが、

「すっかり橘花ワールドに溶け込んでるな」

なんて敬太郎が言うから、

「フリだったの」

と本音が口をついて出た。しまったと思う間も無く橘花は演技がかったやり方で目を見開き、おれを撫でようと伸ばしかけた手をわなわなと震えさせ、酷い辱めを受けたとその表情で主張する。

「冗談冗談、友達友達」

単語を書き写す時のような気持ちで言葉を紡ぐと、橘花は宙ぶらりんになっていた手を再び伸ばし、おれは細い指が髪を撫でる柔らかい感触を甘んじて受け入れた。溶け込む、という敬太郎の言葉に過剰に反応してしまった自分への罰として。

溶け込むではいけない。混じるが、溶けない。水の中の、一粒の砂のように。

おれは教室で過ごす全ての日に、自分にそう言い聞かせている。

そして、和やかな雰囲気の中。

「——ホント嫌になる」

棘をむき出しにした呟き声。敬太郎と橘花はおれの隣を見るが、おれは見ない。

「どうしたんだよ瀬谷、ご機嫌斜めだな」

敬太郎があくまでも普通の口調で言う。入学から二週間弱、ご機嫌真っ直ぐだったことなんてないこの女に、こんな風に接するのはもはや敬太郎だけ。

瀬谷伊音。

天然であろう茶色がかったボブに、少し釣った大きな目、桜色のやや薄い唇、白い肌。全体的に色素が薄く身体も細い。入学式で初めて見た時には目を奪われ、教室に移動して隣の席と知り、幾分か幸運に思った。

それから二週間、なぜかおれは瀬谷に物凄く嫌われている。

おれを睨むか、イヤホンで音楽を聞いているか、教室に居ないか。

「そうだ」敬太郎はめげずに瀬谷に話しかける。「瀬谷聞こえてた？ さっきの心理テストのやつ。瀬谷はどうよ？」

そしてようやく。

瀬谷伊音はため息とともに、口を開いた。

「父親が息子を許したのは、信じていたから——」吐き捨てるように言った。道徳的な答え。そう聞こえたのはあくまで一瞬だった。「——ワシントン家は代々奴隷プランテーションを経営していたから父親は桜の木を切ったのは薄汚い奴隷どもで私の可愛い息子は薄汚い奴隷どもを庇っている素晴らしい子だと思いい、奴隷を更に搾取しようと思いましたがとさ」

あっけにとられるおれたちをよそに、瀬谷はその小さな耳に突き刺すようにしてイヤホンをセツトした。ホント嫌になる。その口癖をもう一度繰り返して。

教室というろ過装置、瀬谷伊音という不溶性物質。

「瀬谷ってS特なんだってな」

運動した後とは思えない涼しい顔で敬太郎は言う。おれたちは一限の体育を終えて校舎に向かって歩いている。年功序列の逆で一階が一年、三階が三年の教室となっている。疲れた後ではそれが助かる。

「S特？ まじで？」

おれは驚いたように返したが、すんなりとその事実を受け入れることが出来た。瀬谷伊音

がSランク特待生というのは、似合っているように感じられる。

「そう、S特。学費等全免除、どの時間にどの授業を選んでもいい」

「すげえな、とおれは素直にそう言った。我が織乃<sup>おりの</sup>学園は生徒の能力別ランク分けが細かく、特待生の中にもSからCまで四つの等級があつて、上に行くほど扱いが良くなる。

「すげえよな」敬太郎は頷く。「ていうかその瀬谷は体育いたっけ？」

「サボりだろうな」

瀬谷伊音はよく体育をサボる。その姿は女子の中に確認出来なかった。

「サボりか。まあS特なら許されるんだろうな。俺もサボりや良かったかな」

クラス一の好成績を残した敬太郎は、首を鳴らしながらそう言った。

「……てことはまさかお前」

「うん、Sだよ」

「じゃあすげえなとか言うなよ！ マラソンにおける『一緒に走ろうねニコッ☆』的な何かを感じたよ今！」

「いやいや、実際俺にしてもすげえよなつて思うんだよ。至れり尽くせりで」

瀬谷と敬太郎は、良くも悪くも目立つ二人だ。クラスでは突出した存在である。その二人がSというのは、順当といえはそうだろう。ちなみに、他におれが等級を知っている生徒は、最初から隠していなかったA特の橘花だけだ。

「お前は？」

「お察しの通りでございます」

「Aか？」

「低っ！ お察し力低っ！」



「じゃ、B?」

「……一般ですみません、生まれてきてすみません」

「そうか……いや、お前は目に付くからさ」

SとCの下、最底辺である一般生のおれが目に付くのか。それは困る。おれは注目を浴びたくない。

「そういや瀬谷って」とおれは話題を逸らした。「誰とも喋らないよなあ」

「そうだな。鈴ちゃん先生とは超仲良いんだけどな」

鈴ちゃん先生というのは担任で、背が低く眼鏡をかけていて女子大生のように見える幼い外見をしているが、れっきとした教師である。

おれの脳裏に瀬谷と鈴ちゃん先生の姿が浮かぶ。この前たまたま職員室に行った時に二人が仲睦まじげに話している場面に遭遇した。まるで姉妹のように笑い合う二人。

「Sにはスカウトが来るからな。瀬谷のスカウティングをしたのが鈴ちゃんだってね。あれでも瀬谷って中学時代に比べればだいぶおとなしいらしいぜ? 自分の所為で先生に迷惑がかかるのが嫌なのかもな。そう考えると、悪い奴でもなさそうだ」

敬太郎は全く乱れていない髪を弄りながら、横目でちらとおれを見る。

「なんだよ」

用心しながら聞く。他意があるように感じるのは勘ぐり過ぎかそれとも。

「いや別に?」敬太郎は軽く眉を上げる。「せっかく隣なんだから、仲良くなってくれれば良いなあってね」

流れるような敬太郎の口調とは逆に、おれは少し口ごもり曖昧に返事をした。敬太郎と話していると、時々誘導されているような気分になる。

## ご購入はこちらから

---

こちらは、試し読みです。続きは、こちらで購入できます。

### ■講談社BOX編集部が手がける電子雑誌「BOX-AiR」創刊！

「BOX-AiR」は、西尾維新氏の「化物語」シリーズなどで知られる講談社BOXと、各界の著名なクリエイターが個人として集まり作り上げられた電子書籍「AiR」、そして「新世紀エヴァンゲリオン」など多数のヒット作を手がけるスターチャイルドが、新しい才能発掘を目指して創刊した電子雑誌です。

### ＜アニメ化作品を発掘！！「BOX-AiR」の特徴＞

新しい才能の発掘と育成を目的としている点は従来の文芸雑誌と変わりありませんが、最大の特徴は掲載原稿の募集を公式サイトで行い、ひと月単位で選考を行った上で、掲載される点。

また、毎号スターチャイルド制作グループを交えて掲載作品のアニメーション化が検討され、連載が単行本1冊分掲載された作品については、講談社BOXから紙の書籍として単行本化されます。

**BOX-AiR**零号/講談社BOX-AiR

価格：350円

パプー版（パソコン・PDF・ePub）：<http://p.booklog.jp/book/18527>

iPhone・iPadアプリ版：<http://itunes.apple.com/jp/app/id415281243?mt=8>